

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「子どもへのまなざし」より

Q：気になる子どもたちを、どう指導したらよいか？

A：おもちゃを振り回したり、わざと人の嫌がることをしたりする子どもに対して、厳しく叱るだけの指導をしても事態は悪くなる。本当は親に向かってやりたいのに、それができないから愛情を確かめる行為として外でやっている。

育児や教育の大事なところは、子どもの自発的な行動を許しながら、ある程度、自分の感情や欲求をセーブできるように、子どもたちを育てていくところにある。そうでなければ、たえず怖い人がいなければ、ルールを守れないことになってしまう。

「ああしなさい、こうしなさい」というような指示や命令を可能な限り少なくする。できない子どもは、やる気になれる環境づくりと、子どもからの希望や要求をたくさん聞いてあげることが大切である。自分の要求が受け入れられているという経験が積み重なっていくと、攻撃的な感情はなくなっていく。他の子どもから見て、「〇〇さん、えこひいきをされている」という気持ちを感じさせないですむ範囲でたくさん要求を聞くこと、話を聞くこと、「こうしてほしい、ああしちゃいけない」と言いたいことを我慢できるようにすることが大切となる。「聞く」と「待つ」がポイントとなる。

Q：子どもの特性を、保護者にどう伝えたらよいか？

A：たいいていの場合、保護者は子どもの問題について気が付いている。しかし、問題がないということにしたい、心配はないと思いたいのである。人間には、自分が恐れていることを認めたくない、逃げたいという感情がある。

特性の強い子どもの両親が夫婦で信頼し合っている、親類に悩みを聞いてくれる人がいる、園や学校に相談できる人がたくさんいれば、子どもの特性を受け入れやすい。人間は自分の味方になってくれる人が、多ければ多いほど、相手を信じやすくなる。「自分はこの人なら信じてもいい」と保護者が相手を信頼できるような関係にならないと、よくないことは伝えづらい。



園や学校の先生が直接伝えるよりも、第三者（保健師、巡回相談員、教育関係者等）から伝えてもらう方法や、第三者が「おたくのお子さんについて、ちょっと心配なところがある」「念のために相談されてはどうですかと話していました」という伝え方をする。大切なことは、伝え方の技術ではなく、保護者に対する思いやり、保護者の立場に寄り添う姿勢である。

私が検査報告をする場合は、なるべく夫婦、あるいは信頼できる家族や学校の先生が揃ったところで伝えている。お母さんが一人で聞いて帰るのと、誰かと一緒に聞いて帰るのでは全く受け取り方が違うからである。二人なら喜びは2倍に、悲しみは半分にできる。特に知的発達の遅れが疑われる場合、お母さんの悲しみを分かる人がそばにいてもらうようにしている。困難なことを受け入れる、それに立ち向かう、そういう勇氣は信頼できる人や理解し合える人々との日常的な関係の中でから、湧き上がってくるからである。

参考図書：続「子どもへのまなざし」 児童精神科医：佐々木 正美



とれたて直送便



「15・45・90の法則」～集中しやすいリズム～

15分は人間が非常に深い集中力を出せる時間（同時通訳の交代時間）、45分は一般的な集中力（小学校の授業時間、ドラマの時間）、90分は集中力の限界時間（大学の講義、サッカーの試合時間）と言われています。子どもが集中力を最大限発揮できるように、10分～15分の内容を組み合わせたり、気分転換を図ったりする活動を用意しましょう。